

## アンデス研究のさらなる発展をめざして：大貫良夫氏のご批判にお答えする（リプライ）

著者	山本 紀夫
雑誌名	古代アメリカ
巻	8
ページ	93-102
発行年	2005-12-01
その他のタイトル	Reply to the book review by Prof. Y. Onuki (Reply)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008373">http://hdl.handle.net/10502/00008373</a>

『古代アメリカ』 8, 2005, pp.93-102

## <リプライ>

### アンデス研究のさらなる発展をめざして - 大貫良夫氏のご批判にお答えする -

山本紀夫  
(国立民族学博物館)

まずは、アンデス研究の先達である大貫良夫氏（以下では氏と略称）から拙著に詳しいコメントをいただいたことに対して厚く御礼申し上げます。氏も述べておられますようにアンデス農耕の歴史にかかわる諸問題は「何度でも議論すべき課題」です。拙著の出版がきっかけになって大いに議論がおこり、それがアンデス研究のさらなる発展につながれば筆者の私としては嬉しいことです。そこで、広く議論がおこることを期待して、氏のご批判にお答えさせていただくことにしました。なお、拙著を読んでおられない方のことを考慮して、お答えする順序を少し変えました。

#### 1. 何が主食か

氏は、「山本はさかんに主食は何かと問題にするが、何をどれだけ食べると主食になるのか、それは定義していない」と述べておられます。そこで、まず何故、わたしが主食を問題にするのかという点からお答えしておきます。

文明の成立や発達には農耕の存在が欠かせません。それはアンデス文明も同様でしょう。農耕が発達し、食糧の余剰とその蓄積が可能になって、はじめて社会の階層化がおこり、文明の形成につながったと考えられるからです。ところが、不思議なことにアンデス文明を生み出した農耕について本格的に取り組んだ研究者はほとんどいません。それにもかかわらず、一般的にはアンデス文明を生んだ農耕はトウモロコシ農耕であると言われてきました。それを象徴するものが日本の高等学校の教科書です。拙著でも指摘しましたように、ほとんどの教科書でトウモロコシ農耕がアンデス文明を生んだと述べているのです。

たしかに、トウモロコシは主食になりうる作物です。しかし、アンデスには主食になりうる作物がほかにもあります。それがジャガイモを初めとするイモ類です。実際に、わたしはアンデスのあちこちでジャガイモなどのイモ類を主食にしている人たちを見てきました。ところが、これまで研究者はトウモロコシの重要性のみを強調し、ジャガイモなどのイモ類が果たしている役割については注意を払ってきませんでした。そのため、わたしは本書でジャガイモなどのイモ類を中心にした農耕もアンデス文明に大きな役割を果たしたのではなかったのかということを書いたわけですが、

さて、主食とは何か。これについては拙著でも言及しておりますので、その部分を記しておきます。

「ここで注意しなければならないことがある。それは、食糧生産の最初の段階では様々なものを食

糧源にしていたであろうが、農耕を基盤にした社会では、ひとつ、あるいは二、三の栽培植物が人口の大部分に対して食糧の大半を供給するようになることである。これが主作物とよばれるものであり、これから必要カロリーの大部分がとられる。主食となる栽培植物は単位重量および単位面積あたりのカロリー量が高いものになっており、これらのほとんどは穀類かイモ類なのである」[81頁]。

このように、農耕社会では「食糧の大半を供給する」作物が主食であると考えてよいのではないのでしょうか。

## 2. トウモロコシの特異な価値について

この主食という点で、アンデスでは注意しなければならないことがあります。先述しましたように、トウモロコシは主食になりうる作物ですが、アンデスでは食糧としてだけでなく、酒の材料としても利用されることです。この点こそは拙著で強調したかったことなのです。トウモロコシの起源地はメソアメリカであることが確実視されておりますが、そこではトウモロコシが酒として利用されることはほとんどありません。したがって、トウモロコシの酒としての利用はアンデスで独自に発達したユニークな方法であると考えられるのです。

トウモロコシの酒はアンデスでは一般にチチャの名前で知られ、現在も先住民社会では儀礼や宗教の上で欠かせないものです。そして、チチャ酒としての利用は、トウモロコシが食糧源としてだけでなく、儀礼的、宗教的にも大きな意味をもつ作物であることを示唆するものでしょう。そのため、私は拙著でトウモロコシのもつ特別な価値を明らかにすべく努力しましたが、この点に関して氏はまったく注意を払っておられません。その違いが、どうも拙著に対する氏の様々なご批判になっているようです。たとえば、氏は「山本はモチエ時代でトウモロコシが食事のなかで 50 パーセント近く占めることを認めつつも、まだトウモロコシに「主食」の地位を与えようとしな」と批判しておられますが、この箇所での私の力点はトウモロコシのもつ特別な価値の可能性を指摘することにあります。

このように、私は必ずしも何が主食であったかということだけを問題にしたわけではありません。アンデスで重要な作物となっているジャガイモなどのイモ類とトウモロコシのもつ役割や意味を探り、それがアンデス農耕文化、ひいてはアンデス文明にどのような影響を与えたのかということも拙著で明らかにしたかったことでした。

## 3. ジャガイモ栽培の始まりの時期について

アンデスにおけるジャガイモ栽培の始まりの時期について、私は紀元前 4000 年頃と述べましたが、氏は「山本の考えは考古学的な証拠の裏付けを欠いている」と批判しておられます。拙著でも述べましたように[79 頁]、植物の栽培がいつ頃から始められたのかということは大変難しい問題です。ジャガイモ栽培の始まりの時期についても諸説ありますので、この問題に対しては私も慎重に扱ったつもりです。最終的に依拠しましたのは Pearsall[1992]の報告ですが、それは彼女がアンデスにおけるこれまでの栽培植物の出土状況をレビューした上で出した結論であったからです。この説を補

強するものとしては MacNeish[1980]のイヤクーチョにおける発掘報告もあり、ジャガイモ栽培の開始時期については彼に私自身が直に確認しております。そして、私は栽培時期を断定せず、「ジャガイモを中心とする農耕が紀元前 4000 年頃から始まった可能性が高い」と可能性を述べるにとどめております。

このジャガイモ栽培の始まりの時期について、氏は「山本はトレス・ベンターナスやギタレーロ洞窟で栽培の年代が古いことを取り上げているが、最近ではこの二つとも年代は栽培を示すものではないことになっている」と批判しておられます。しかし、私はどちらの洞窟遺跡でも、古い時代に「多様なイモ類が食糧源として利用されていた」[60 頁]と述べているだけで、栽培とは一言も言っておりません。とくに、ギタレーロ遺跡で出土したものについては「野生か栽培化されたものかは明らかではなかった」と述べております。

ちなみに、トレス・ベンターナスで出土したジャガイモの年代を、氏は Hastorf[1993: 111]の記述にもとづいて、「最近の測定のし直しでは紀元前 500 年頃である」と述べておられますが、この Hastorf の記述は Hawkes[1990: 18]を引用したものであり、しかも彼女は間違っただけで引用しております。すなわち、原著では紀元前 500 年頃ではなく、7000B.P.と記されているのです。

#### 4. 出土しなかったものをどのように考えるべきか

「ジャガイモの栽培の始まりを紀元前 4000 年頃とする山本の考えは考古学的な証拠の裏付けを欠いている」と氏が批判される背景には、もうひとつの事情があります。それは、出土しなかったものをどのように考えるべきかということに対する氏と私との考え方の違いに由来しているようです。氏は、あくまで出土したものにもとづいて論を進めておられます。これは、氏が遺物を中心に考える考古学者だから当然のことかもしれません。しかし、そのような考え方に対して私は疑問をもっており、出土しなかったことは必ずしも存在しなかったことを証明するものではない、と考えております。たとえば、氏は「チリパで紀元前 800 - 500 年に炭化したイモが見つかった」として「これが（イモ類栽培の）最古の証拠ではなかろうか」と述べておられますが、チリパで出土したイモは、それ以前のイモ類栽培の可能性を否定するものではないはずです。

よく知られておりますように、イモ類は考古学的遺物としてはきわめて残りにくいものです。イモ類は食べれば、あとにほとんど何も残らないからです。また、イモ類は水分を多く含んでいるため腐りやすいからでもあります。したがって、イモ類が考古学的遺物として出土することはきわめて稀なことです。そのきわめて稀な出土事例に依拠して論を進めることは大きな危険性があるのではないのでしょうか。

そのため、私はできるだけ総合的な見方でジャガイモ栽培の始まりの時期を推定いたしました。これには Pearsall[1992]や MacNeish[1977]の説も参考にしましたが、それだけではありません。ひとつは、先土器時代にペルー中部海岸のカスマ谷でサツマイモやマニオクとともにジャガイモが出土していることです。このカスマ谷の調査ではデンプン粒によってイモの種類の間定をおこなっており、出土したものは栽培種であったとされています[Ugent et al. 1982, 1983, 1986]。このことから海岸地帯では紀元前 2000 年頃にジャガイモが栽培されていたこととなります。ここで注意しなければならないことがあります。それは、ジャガイモは寒冷高地に適した作物であり、起源地もティティカ

カ湖畔であることが植物学的に明らかにされていることです。したがって、アンデス高地でのジャガイモ栽培は海岸地帯よりもっと古い時代に始まっていたと考えなければならないのです。

もうひとつの傍証があります。それは牧畜との関係です。アンデスの牧畜は本来的に乳利用を欠いたものであり、農耕の存在なしでは成立しえないものです。したがって、アンデスにおける牧畜の始まりは農耕の開始以降と考えるのが妥当でしょう。その牧畜の始まりは紀元前 4000 年頃と推定されております[Wheeler 1988]。獣骨は考古学的遺物としては比較的残りやすく、その骨にもとづいた調査結果です。しかも、この牧畜が始まったのは、ジャガイモなどのイモ類が栽培化された中央アンデス高地です。これらのことから、ジャガイモ栽培は紀元前 4000 年頃に始まっていたと考えたわけです。

## 5. 海岸から高地へ？

ジャガイモ栽培の始まりについて、氏は「海岸のイモ栽培がアンデス高地のジャガイモ栽培の影響とする見方も成り立たない」と批判しておられます。じつは、この私の考え方は氏が発表された説[大貫 1995]に触発されて考えたものです。ただし、私の考え方は氏とはかなり違います。そこで、その部分の氏の記述を以下に記しておきます。

「ジャガイモはおそらくペルーで発見されたのであろう。はじめは海岸のローマス地帯で利用され、それが高地や寒冷に強いことがわかるにつれて、キチュワからスニ、プーナなどの標高の高いところへ普及したと考えられる。(中略) 低地の温暖な環境での根栽類栽培の長い伝統がジャガイモその他高地に強い根栽類の栽培化を導いたものであろう」。

つまり、氏はジャガイモなどのイモ類の栽培化が海岸地帯で始まり、それが高地のイモ類の栽培化を導いたと述べておられるのです。もし、このような考え方が考古学的に可能であるのであれば、その伝播の流れは逆ではないのかと私は考えました。先述しましたように、ジャガイモが栽培化されたのは中央アンデス高地であることが明らかにされているからです。また、中央アンデスの海岸地帯で栽培化されたイモ類はひとつもありません。これはアンデスで栽培化されたイモ類の野生祖先種が海岸地帯に自生していないことから明らかです。それに対しまして中央アンデス高地で栽培化されたイモ類はジャガイモを初めとして少なくありません。このような事実を見れば、氏の説とは逆に高地でのイモ類栽培の長い伝統が低地でのイモ類栽培の始まりを招いたと考えられるわけです。

このあと、氏は「ジャガイモ栽培は熱帯のイモ栽培との関連性を考えた方がよい」と指摘しておられます。これは、私自身もそのとおりであると考えております。また、氏はユカ（マニオク）の毒抜きとジャガイモなどの毒抜きとの関係も言及しておられますが、これも私はすでに指摘しております[山本 1982]。これらのことは、南アメリカが本来的にはイモ類を中心にした農耕をベースにして発展してきたことを物語るのではないのでしょうか。したがって、アンデスを含む南アメリカの農耕文化の研究では、トウモロコシではなく、真っ先にジャガイモやマニオクなどのイモ類を中心にした、いわゆる根栽農耕こそを考えるべきであると考えており、拙著もその方針にそったものなのです。

## 6. チャビン・デ・ワントルの食糧

この点に関しての氏の疑問は、 $C_3$ 型植物の多いことは認めつつも、「そのうちのどれをたくさん食べたかはわからない」という点でしょう。たしかに、アンデスで $C_3$ 型植物に分類されるものにはジャガイモ以外にも、オカヤオユコ、キヌア、インゲンマメなどがあります。ここで問題になってきますのが主食というカテゴリーです。先の文章でも述べましたように、「農耕を基盤にした社会では、ひとつ、あるいは二、三の栽培植物」が主食になるのがふつうです。これは消費の点からだけでなく、生産の点から見ても言えます。どこでも、主作物は一種類か二種類くらいで、残りは小規模にしか栽培していません。私はアンデスのほかにも、アマゾン、ヒマラヤ、チベットなどでもフィールドワークを行いました。どこでもそうでした。

したがって、氏が主張されるように「もしバランスよくそれらを食べていたならば、一種類の作物はせいぜい20パーセントかそれより少し多い程度であろう」ということにはならないでしょう。実際に、私が調査したマルカパタ村でも食事に占めるイモ類の割合は80パーセントくらいになり、Webster[1971]が調査したケロ村もそうです。さらに、ヌニョア村でもイモ類の占める割合は80パーセント近くに達します(259-263頁)。決してアンデス農民はいろいろな作物をバランスよく食べているわけではなく、かなりイモ類に偏った食事をしているのです。

もうひとつ、ここで指摘しておきたいことはトウモロコシの用途についてです。はたしてトウモロコシは食糧源として重要であったのでしょうか。先述しましたように、儀礼や宗教上に重要な酒の材料としてトウモロコシを大量に利用していたのではなかったのでしょうか。インカ時代の記録や現在の民族誌を見るかぎり、その可能性は高いと考えられます。だからこそ、チャビン・デ・ワントルの調査をしたBurgerら[1990]もトウモロコシは儀礼用に使われたと考えたのではないのでしょうか。

## 7. トウモロコシ・寒冷根栽複合について

上記のような考え方をされる氏の根拠には「トウモロコシとその他の組み合わせで（アンデス住民の）食事が成り立つ」と考えておられることがあるようです。この点について氏は、「形成期に海岸低地にトウモロコシ・温暖根栽（ユカなど）複合、高地でトウモロコシ・寒冷根栽複合ができあがったと考える」と述べておられます。とくに、高地では「下方でトウモロコシなど、上方でジャガイモや家畜飼育をして、原則として食糧の全体を自給する生活があったと考えるべきである」と述べておられます。たしかに、海岸地帯では氏の説のとおりなのかもしれませんが、高地ではトウモロコシ・寒冷根栽複合とともに、別のタイプの環境利用の方法もあったのではないのでしょうか。

実際、高地ではトウモロコシ・寒冷根栽複合が見られます。私が調査したマルカパタ村の生業形態はまさしくその例です。しかし、高地ではこれ以外の環境利用の方法もあります。それはトウモロコシ栽培を欠き、ジャガイモなどのイモ類栽培とラクダ科家畜の飼育を複合させた、いわゆる農牧複合タイプです。このタイプの環境利用の方法がティティカカ湖畔を中心として広く見られます[258頁]。さらに、一部地域ではトウモロコシ栽培どころかジャガイモ栽培さえも欠き、リヤマやアルパカなどの家畜飼育だけの、いわば牧畜専業の生業さえ知られるようになっていきます[Webster

1973、稲村 1995]。そして、このような地域ではトウモロコシは食事にほとんど、あるいはまったく供されておりません。それを示すものが図 6-2[261 頁]です。

このことから、高地ではトウモロコシがなくても食糧は自給できることが明らかです。したがって、「下方でトウモロコシなど、上方でジャガイモや家畜飼育」することは必ずしも食糧を自給するための生活ではなく、別の要素も考えなければならないのではないのでしょうか。それに対して、わたしはトウモロコシは食糧としてだけではなく、儀礼や宗教の上で不可欠なチチャ酒の材料としての重要性も指摘したのでした。

ひとつ疑問があります。氏が述べておられる「トウモロコシとその他の組み合わせで食事が成り立つ」という考え方に対してです。これは、ご自身の観察にもとづくものなのでしょうか。もしそうであれば具体的なデータを提示してくださるようお願いいたします。「これまで先住民社会の食生活について調査したものはきわめて少なく、信頼できる報告も限られている」[259 頁]のですから、ご自身の観察にもとづいた報告があれば貴重なものになるはずです。

## 8. マンタロ盆地での主食は何であったか

Hastorf ら[1993]の報告にもとづいて、私は「マンタロ盆地でみるかぎり、インカが成立する直前までトウモロコシは食糧としてはさほど大きな役割を果たしていなかった」と述べましたが、それに対して氏は、「ワンカ II 期という混乱の時代の人口推定だけでマンタロ盆地全体での高地産イモ類の卓越性を論じるのは間違いである」と批判しておられます。しかし、私は決して人口推定だけで高地産イモ類の卓越性を論じたわけではなく、植物遺体の同位体の分析結果も利用しております。そして、「ワンカ II 期までのマンタロ盆地での主作物はジャガイモなどの C<sub>3</sub> 植物であり、トウモロコシに代表される C<sub>4</sub> 植物はマメ類と同じくらいすくなかったとされる」と述べました[132 頁]。この同位体の分析結果の詳細につきましては、『ネイチャー』誌に発表された Hastorf and DeNiro[1985]をご参照ください。

もうひとつ、わたしが高地産イモ類の卓越性を論じた根拠があります。それは、インカ時代の直前までアンデス高地におけるトウモロコシの大規模な栽培を積極的に支持する考古学的な証拠がないことです。そのため、考古学者の Rowe[1950]や歴史学者の Murra[1978]たちも、トウモロコシの大規模な栽培はインカ帝国の版図の拡大とともに始まったと考えたのではないのでしょうか。ただし、山岳地域でも大規模な栽培がもう少し前から始まっていた地域もあったのではないかと私自身は考えております。それがアンデスで最初に階段耕作の始まったワリです。そのため、私も「(ワリでは)イモ類の栽培にくわえてトウモロコシも積極的に栽培するようになったと考えられる」と述べたのです[128 頁]。いずれにしても、アンデスの山岳地域におけるトウモロコシの大規模な栽培はさほど古い時代にはさかのぼれそうにありません。これは、拙著を刊行した後に発表された関・米田[2004]両氏の報告でも明らかです。両氏は「形成期から地方発展期というアンデス文明の形成過程における早い時期においては、C<sub>4</sub> 植物への依存がさほど見られず、後 1000 年以降、急激に依存が高まる」と述べているのです。

## 9. ジャガイモは主食でない？

氏は「ジャガイモを主食と言い切るのには適切ではない」と批判しておられますが、これにはやや誤解があるようです。どうも氏は、私が中央アンデス全域でジャガイモを主食であると言っているかのように受け取っておられるようですが、私は決してそのようなには述べておりません。たしかに、「主食はジャガイモ」と述べた小見出しもありますが[165 頁]、これはシエサ・デ・レオンの報告からの引用であり、そのためにカギ括弧をつけているのです。また、クロニカを引用した部分でも「これらの記述からみて、ティティカカ湖畔のような寒冷高地での主食はジャガイモおよびそれを乾燥したチューニョであったと判断してよさそうである」と、寒冷高地に地域を限定して述べています[168 頁]。

この点に関しての一番の問題は、アンデスには大きな高度差があり、また自然環境も多様であるにもかかわらず、それらを無視して中央アンデス全体をあたかも平地であるかのように一般化してしまうことにあると私は考えています。そのため、私はペルーからボリビアにかけての山岳地域での県ごとのトウモロコシとジャガイモの生産量の比較をしたわけです。これは誰も試みたことがなく、これまでは印象だけ、あるいは一部の限られた地域だけでの観察でアンデス農耕の特色が語られていたように思います。そして、この比較の結果、ペルー中部高地からボリビア北部にかけての山岳地域は、とくにジャガイモ栽培の卓越していることが明らかになりました。これを私は中央アンデス根栽農耕文化圏と呼んだのですが、この地域ではジャガイモが主食であると考えてよさそうです。一方、海岸地帯やペルー北部のような地域ではトウモロコシが主食になっている可能性を私も否定いたしません。

## 10. マチュ・ピチュにおける人骨の分析結果について

氏が引用されている Burger[2004]は、拙著が刊行されてから出版されたものであり、私は目を通しておりません。また、目を通していたとしても私の考え方に変更はありません。周知のようにマチュ・ピチュ遺跡はユンガ地帯に位置しており、ほとんどがケチュアやスニ帯に位置する他のインカ遺跡とは性格が異なっております。したがって、マチュ・ピチュ遺跡の分析結果はインカ帝国を代表するものとは考えられないのです。また、マチュ・ピチュおよび周辺の階段耕地の分布からみて、この地域の住民の主食がトウモロコシであったことに特に驚きはありません。むしろ、このマチュ・ピチュ遺跡の人骨の分析結果やコボの引用文からトウモロコシの重要性を強調しようとする氏の考え方に私は驚いております。トウモロコシの重要性を強調するあまりに、ジャガイモなどのイモ類についての考慮が不足していると思われるからです。また、氏の生態学的な条件を無視した考え方にも疑問があります。上述しましたように、アンデスには大きな高度差があり、そこでは高度によって栽培される作物にも大きな違いがあります。そのため、私は「地域によって中心となる食糧が大きく異なっていた」[180～181 頁]と述べております。また、マチュ・ピチュはクスコ県に位置しますが、この点に関しましても私は「クスコは標高三四〇〇メートルにあるが、その周辺にはトウモロコシの栽培できる温暖な谷間も位置している」[181 頁]と述べております。

このマチュ・ピチュ遺跡の分析結果では、もうひとつ注意しなければならないことがあります。



それは、マチュ・ピチュ遺跡が建築物の構造などから判断して一般庶民のためのものではなくインカの貴族などエリート集団のものであった可能性が高いことです。これまでのインカ研究ではエリートを中心に議論が進められ、一般庶民のことはあまり取り上げられることはありませんでした。そのため、私が拙著で最も力を注ぎましたのは、エリートよりも、一般庶民が何を主食としていたのかという問題を明らかにすることでした。その背景には、インカ帝国では貴族と一般庶民のあいだで食べていたものが違っていたのではないかという推測がありました。実際に、クロニカなどを見る限り、トウモロコシ用の階段耕地は「基本的にインカ王やその親族、さらに国家宗教のために使われていた」(176頁)ようですが、一般民衆はジャガイモなどのイモ類中心の食事をしていたと考えられるのです。したがって、このマチュ・ピチュ遺跡の人骨の分析結果は私の考え方と矛盾するものではなく、むしろ私の考え方を支持しています。

氏が引用されたコボの文で注目しなければならないことは「パンはどこでも同じというわけではない」と述べている点です。この点こそは、私の考え方と同じだからです。おそらく、「最も一般的なのはトウモロコシで、次にキャッサバのパンである」というコボの記録は低地部でのものであると思われます。「その他のパンはいろいろなイモから作る」という観察は主として高地部でのものでしょう。私の観察によりまして、中央アンデスでは高地だけに限ってもオカなどのイモ類あるいはキヌアなどの雑穀を主食にしているところもあります。しかし、それは中央アンデス全体から見れば局地的であり、少なくとも中央アンデス高地ではジャガイモを主食にしている地域が圧倒的に多いのです。

## 11. 高度差利用について

氏は、「高度差利用という場合、単に標高差の絶対数値で大きい方が規模が大きいとか言うのではない」と述べておられますが、これは、おそらくアンデスの人類学が問題にしてきた垂直統御(バーティカル・コントロール)が念頭にあってのご批判でしょう。じつのところ、私は未だ垂直統御の特色が十分に把握できず、それを明らかにするために今もアンデスだけでなく、ヒマラヤやチベットなどでも環境利用の調査をおこなっております。そのため、拙著では垂直統御という言葉の使用を極力避け、高度差利用という言葉を使ったのです。しかし、高度差利用にしましても、氏が述べられている「異なる生態学的区分の複数利用」の点から見ましても、マルカパタ村では食糧源としてはジャガイモ栽培がもっとも重要なものになっていることは明らかです。マルカパタ村でのトウモロコシ栽培は、アンデスの一般的な区分で言いますとケチュア帯しか使っていないのに、ジャガイモ栽培にはケチュア帯、スニ帯、そしてプーナ帯までの「異なる生態学的区分の複数利用」をしているからです。

これはケロもそうです。ケロもマルカパタと同じようにアンデス東斜面の大きな高度差を使って様々な作物を栽培していますが、主作物はジャガイモとトウモロコシです。そして、トウモロコシ栽培にはユンガ帯しか使っていないのに、ジャガイモ栽培ではケチュア帯、スニ帯、そしてプーナ帯までの三つの異なる生態学的区分を複数利用しているのです。

最後に、氏は「トウモロコシは施肥も要らず」と述べておられますが、これは事実と反しますので反論しておきます。じつはトウモロコシは大量の肥料を必要とする作物として知られております。

そのため、アンデスでも化学肥料を使ってトウモロコシ栽培をしているところが少なくありません。たしかに、施肥をしないでトウモロコシ栽培をしているところもあります。マルカパタ村でも先住民の人たちがそうです。しかし、これは施肥を必要としないからではなく、施肥する肥料が十分でないからようです。彼らは家畜の糞を肥料として利用していますが、その肥料はすべてジャガイモ栽培に使い、トウモロコシ栽培にまで使う余裕がないのです。この点を見ましても、ジャガイモ栽培がいかにアンデス住民にとって重要なものであるか、ご理解いただけるのではないのでしょうか。

## 12. 考古学者批判？

ここまで氏のご批判に対してお答えしてきて気づいたことがあります。氏は、拙著の目的のひとつが「従来の考古学者の叙述を批判すること」と述べておられますが、これは氏の誤解ではないかということです。おそらく、この誤解のせいで学問としてはフェアではない」という書評としてはいささか不穏当な言葉まで使って、私を批判されるのでしょうか。しかし、私は考古学の貢献の大きさを十分に認識していたからこそ、専門外ではありますがアンデス考古学の論文を渉猟し、積極的に引用もしたのです。むしろ、氏の方こそが私の依拠した考古学者たちに批判的であるという印象をもちました。たとえば、ジャガイモ栽培の開始時期につきまして、私はピアソルやマクニーシュの説にもとづいて論を進めましたが、氏はどちらも無視しておられます。また、アンジェルによるトレス・ベンターナスの出土報告も「出土状況が明確でない」と批判しておられます。さらに、ハストーフや関の報告に対しても批判的です。この点に関して、氏は「(考古学の) 論文や出版物があってもデータの質は慎重に吟味しなければならない」と述べておられます。これは、見方をかえれば、アンデス考古学ではそれほど信頼できない論や説、さらに報告がまかり通っているということなのではないでしょうか。もしそうであれば、アンデス考古学は仲間うちだけの学問であり、その成果を異分野の研究者が利用することはできないのでしょうか。

じつは、私も考古学者の考え方に疑問を呈したところがあります。そのひとつは、出土しなかったものをどのように考えるべきか、ということです。それについては上述しましたので、これ以上述べません。もうひとつは、氏も関係されたコトシュ遺跡の発掘についての解釈に対してです。このコトシュの神殿は農耕以前の時代に築かれたということで脚光を浴び、それを発掘関係者たちも強調しておりました。それに対しまして私は疑問を呈し、コトシュの神殿は農耕開始後に築かれたのではないかと述べました。それだけに、この点こそは氏の反論を期待していたものでした。

## おわりに

以上ですべてのご批判にお答えできたわけではありませんが、少なくとも私の考え方はご理解いただけたのではないかと判断しております。氏のご批判はもっぱら考古学の立場にたつてのものですが、私が拙著でもっとも意を注ぎましたのは、考古学の分野にとらわれず、生態学や植物学、歴史学、民族学なども含め、できるだけ総合的にアンデス文明を考えようとしたことです。したがって、「都合のよいところは強調し、悪いところは軽視するか無視するというのは、学問としてフェアではない」とのご批判は不適切なのではないのでしょうか。

氏もおそらくご存知のように、私は学位取得まで植物学を専攻し、その後に民族学に転じた人間です。これは、アンデス文明を研究するためには、植物学だけではなく、民族学的な研究方法も取り入れなければならないと判断したからです。また、民族学に転じた後も、アンデスの特色を知るために広くアンデスを歩き回りました。車で駆け回るだけではなく、自分の足を使って歩き、ときにはテントをはっての移動調査もおこないました。さらに、先住民社会にも長期にわたって住み込みました。いずれも学問に真摯に、そしてフェアでありたいと考えたからにほかなりません。

最後に、このような議論がアンデス研究のさらなる発展につながることを願って筆をおきます。